

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科 修士1年 白仁田 俊

今回の研修は、修士課程における本学とハイデルベルク大学およびストラスブール大学、そしてシンガポール国立大学との間でなされる joint-degree program 設立の準備段階として、ヨーロッパの2つの大学を視察し、関係者と交流を図ることが目的であった。

プログラムの概要は以下の通りである。

ハイデルベルク大学では cluster という学際研究を推進する研究機関を視察した。Public Relation 部や財務部などの部署を訪問した後、cluster 長の話をお聞きしてから、cluster の subsection の研究者の話をお聞きした。それから、京都大学と cluster の間の調整業務をつかさどる coordinator を囲んで昼食会を催した。そして、ハイデルベルク大学東洋アジア学科の中にある日本学科の先生と学生の話をお聞きした。

ストラスブール大学では、まず日本語学科の Schaal 先生に大学の施設をその沿革とともに1つ1つ紹介して頂いた。次に、Schaal 先生引率のもとでパリとストラスブールにしかない、国立大学図書館 Bibliothèque Nationale Universitaire を訪れた。最後に日本語学科の修士1年の学生と交流をもった。

ハイデルベルク大学の cluster であるが、ドイツ政府が自国の学術研究の国際競争力を強化する Excellence Initiative という政策にもとづいて資金を出し、学際研究を促進するために各地の大学に設けたものの1つで、cluster という機関は全国にあるそうである。ハイデルベルクには自然科学系と人文系の cluster が存在し、私たちが訪れたのは人文系の方で Cluster of Asia and Europe という名前である。私は、ドイツが学際研究に力を入れていることに興味を持ち、人文系の学際研究に対しても支援を行っていることに感銘を受けた。Cluster of Asia and Europe は上で述べたように自前のオフィスを持っており、自分のところの学生も抱えているところからしてかなり独立性が高いと思われ、transculturality を合言葉にかなり組織だてで構成されている印象を受けた。

後に訪れた日本語学科の先生と生徒の話も大変興味深く、マンガやゲームは勿論のこと、日本の近代史を研究されている方もいることを知り、研究分野の幅の広さに驚いた。

ストラスブール大学は市内に大規模なキャンパスを構えており、あくまで私の感覚であるが、京都大学よりもそれぞれの学部や研究機関の建物が文理の区分にとらわれずに立ち並んでいるように思えた。

国立大学図書館は大変素晴らしかった。入口から入ったところのサロンは天井から光を採り入れる設計になっている。図書館の人の話ではこの設計は、1870年のフランスとプロイセンとの戦争で図書館が破壊される前のものを最近の工事で復元したのだそうだ。建物は現代的で電子検索システムが完備しており、非常に機能的であった。書庫にも入らせてもらったが、とても古い資料から最新の資料まで徹底した管理の下で保管されていた。

その後に訪問した日本語学科の学生との交流では、なごやかな雰囲気のもと話をする事ができた。私は外国語を学ぶことがいかに大変かを日々痛感しているため、彼らが日本語を話やすい雰囲気を作ることを心がけ、また積極的にこちらから話しかけるようにした。

今回の研修において一番得られた学習成果は、対人関係における積極性である。向こうのオフィスの方々に対して進んで挨拶をしたり、お話を質問をしたりすることで、良好な人間関係を構築するきっかけを作れたのではないと思う。また、両大学の先生や学生との間でつながりを作ることができたことも貴重な経験であった。

自身の語学力が未熟なこともあり、もっと内容の濃いコミュニケーションを図る目標を完全には成し遂げられなかった部分もあるが、個人的に外国語の習得に励む傍ら、こうして実践的に人とふれ合うことを通じて国際交流の進展に貢献していきたいと思う。

将来、博士論文を書くために海外に留学したいと考えているが、今度の研修でその思いがますます強くなった。世界には様々な研究機関があつて、多様な研究環境があることを肌で感じたことで視野が広がり、これから海外で研究に取り組む、もしくは海外の研究機関と日本にいながらにして共同する可能性を広く考慮に入れることができるようになった。

研修は終わったけれども、国際交流は一回きりではないと思う。今後も両大学の関係者とコミュニケーションを密にして、関係を継続的で強固なものにしていきたいと思う。そして、ハイデルベルク大学とストラスブール大学、そして今回は訪れる機会をえなかったシンガポール国立大学との間で、修士課程における joint-degree program が樹立され、さらには博士課程でもそれが成し遂げられるのを願いつつ、大学間の橋渡しをするための一助として、密度の濃いコミュニケーションを実現していければ幸いである。